

『郷土に築く』一九六七年二月（故西永良次先生追悼誌編集委員会）

## 富山県の教育計画

矢口 新

総合計画という言葉は、その実体を的確に示さない。英語を使うとキザだが本当はプロジェクトなのである。社会として計画的に動いて行くことを言うのである。このような社会の総合プロジェクトは社会主義国家のお家芸のように考えられているが、しかし自由主義国家でも最近五年、十年のプロジェクトとして社会の発展をはかる営みは多くなっている。こういう傾向になって来たのは近代社会の発展と共に、人間が近代的社会感覚をもち、社会という怪物を牛耳ることを身につけて来たからだといつてもよいであろう。こういうプロジェクトの成功、不成功はその社会のもっている近代的エネルギーを何程かあらわすといつてもよいかも知れない。日本にはところがこの社会生活の底の浅さを示しているといふべきである。都市づくりとか、地域開発とか全く下手である。道路づくり一つでも利権争いがはげしくて総合的発達が忘れられている。

そういう総合プロジェクトが二十五年も富山県に続いているのは、日本という風土の中の出来事としてみると突然変異のようなものかも知れない。しかし国にそういう雰囲気がないとき、それをするのはなかなかむづかしいし、苦勞も多いのである。特に教育の世界ではそれが著しいといつてよいであろう。教育は二十五年行政あれどもプロジェクトなしという状態が特にはげしい。そのなかでまがりなりにも、ともかくよく続けて

来たものである。

総合プロジェクトを成立させるには、さまざまな人々の考え方を一つにまとめなくてはならない。言いかえれば、あらゆる分野階層の人々をいかに納得させられるかにかかっていると云える。文部省も、県も、更に教育の現場も、教育の受益者である県民も、みんながよしとしくなくてはどこかで棚上げしてしまうのである。そう考えると十五年間富山県の教育計画が一つのプロジェクトとして生きて来たのは大したことだといつてよい。

○

しかし富山県においてもこういう意味のプロジェクトとして最初から教育計画が位置づいていたわけではないようである。県の総合開発計画が発想されたとき、教育計画をどうするかについての考え方には、今みんながもっている観念とはちがったものもあつたらしい。たとえばそのプロジェクトを行なうときに社会教育を利用して宣伝することはなにがしかの助けになるだろう程度のこととも言われたようである。そういうものになりさがつていなくて本当によかつたのではないかと思う。

というのは、今ほど本当の意味のプロジェクトとしての総合開発計画が要求されている時代はない。百年の伝統をもつ日本の教育も大きく変わらなくてはならないことが、今やはっきりして来た。革命的転換といつてもよいかも知れない。それが世界の大勢からの要請なのである。二十一世紀を目ざしてというようなことがよく言われるが、それがいま現にあらわれて来たのである。教育は産業革命の潮流が攻撃しなければならぬ最後の手工業のとりでだといわれているが、まさにその体質改善の攻撃がいまはじまったのである。この世界的な動向が、富山県の教育計画を生み出す基盤なのである。しかしこれがはじめから自覚されていたわけではないことは、前に述べた通りであるが、プロジェクトが進出していく過程ではつきりして来たのである。

最初にこの教育計画を中心となって手がけたのは富山県教育研究所であったが、今から思うと、この研究所の陣容はすばらしいものであった。長い歴史を眺めることのできる人と、その上に立って将来の社会の夢を描くことのできる人と二種類の人がいて、うまく調和して総合計画を手がけたのである。その未来の夢を描く人としていたのが西永君であった。西永君はいわば手工業の堡壘を改修する産業革命軍の軍事司令官というべき人であった。こういう人がいて、海のものとも山のものともわからなかった富山県総合教育計画を、生命あらしめてくれて、そのためにわたし達は、総合プロジェクトの社会的意義、革命的意義を自覚させられている。

○

総合教育計画が産業教育のサービスセンターという発想を打ち出したのは、今にして思えばうまくやったということであろうか。社会の一つの動きが十五年つづくということは実にさまざまな条件が必要なものである。サービスセンターは、教育手工業のとりでを中央突破する第一弾だった。第一弾の放ち方がわるいと後が続かないおそれがあるが、サービスセンターはその点で効果的だった。

教育の体質改善をどういう過程をたどって進めるかはいろいろな考え方があってと思う。第一次総合教育計画の当時の教育界の事情からするならば、教育計画という言葉は教育課程計画というニュアンスをもっていた。しかし実質は文部省の定めた課程を地域の実態に合わせて色をつけるという程度がせいぜいであった。そういう概念のものでは十年のプロジェクトとするに足りないことは言うまでもない。しかし教育で基本的にプロジェクトとすべきことは、やはり実体である。施設や設備はその条件であるにすぎない。施設や設備のあり方をきめるのは実は、教育の実体となる教育のプロセスなのである。

施設や設備をただその点からのみ十年間のプロジェクトとすることは、十年後には廃物となる施設設備をつみあげることになりかねない。といっ

て教育の実体は条件の整備なしには改善されないものである。教育のプロセスというものは、施設設備のみならず、教材教具も、教師や生徒の行動の仕方をも含めた、一種の習慣として成り立っている生活そのものだといってよい。それは大へん巾広いもので、それを全面的に十年のプロジェクトとすることは散漫になって、焦点を失うことになる。

また焦点問題の一つとして初等教育か中等教育かということがある。総合計画は県という行政当局の行なうものであるから、そのシステムを基として考えれば後期中等教育が焦点となるという形式論もなり立つが、実質的に、県という地域の教育の体質改善のための総合プロジェクトという見地からすると、必ずしも形式論ではないものがある。

それやこれやさまざまな問題があり、相当にはげしい論争も行なわれた。最後にきめるものは現実の精細な分析とその歴史的発展段階における定位の問題である。当時としては画期的な調査、分析、解釈の共同作業が行なわれたが、今から考えても堂々たるものであったと思う。

こうして総合プロジェクトの中核として結集されたのが、サービスセンターであった。これが富山県のその後の方向を決したのとも言えよう。

○

このサービスセンターをものにするになると、西永君の独壇場であった。このプロジェクトの企画の段階では、スタッフはみな現実の分析と解釈から必然のものとして観念上は認めなければ、さてこれを現実のものとしてこの世に送り出すとなると、大変な問題があった。わるい言葉でいえば、まわりの人をだましだまし、とうとうサービスセンターをものにしたのは大した腕前であった。

私は計画の初期の段階で県の高등학교を調査して歩いたとき、その教育を博物館的教育と悪口を言ったりして失礼をしたが、センターはそれを打ち破って、生徒の一人一人に産業の現場的結論を与えるための中枢機関としての役割を果たすものと発想されたのである。

この機関は現実体として考えると二つの機能をもつものとなる。一つは実習授業という形を通じて自らが教育の場としてのモデルをつくることであり、もう一つは、その体験を土台として産業教育体制の転換のためのプランとエネルギーをつくりあげることであった。その前者は共同実習場という文部省の方針に便乗して実施された。もう一つの役目は十年という短い期間ではなかなか果されるものではなく、むしろこれからの問題として残されている。

教育が手工業から脱却する道は個別化ということ、現実体験の教育にあることは漸く一般に自覚され出したが、このはしりは、産業教育館の活動の中に具体的に実施されていた。私はこの営みを日本教育の体質改善のためのトライアウトという意味でたえず注目しつづけていたが、そこで実はプログラム学習の基礎理論を発想することができた。理工実習場での研究を通じてラウンド方式などという概念をうち出したのは国立教育研究所がこのプロジェクトに応援した頃のことである。これがプログラム学習の初歩段階であった。

同じ方向のプロジェクトとして、いわゆる産業高校方式といわれる定時制教育の新しいあり方をも生み出した。これも産業の現実の中へ入りこんで、そこでの実践人を生み出す新しい教育方式の探求であり建設であった。この辺の八面六臂の富山県教育の活躍の中枢には常に西永君が居った。

○ 定時制高等学校に産業高校方式を生み出したのもその根源は産業教育館というエネルギーの蓄積があったからである。これが現在日本の後期中等教育再編成の立場から全国的に注目されているが、発足の当時はどちらかと言えば四面楚歌であった。

しかし生命を失なった高校教育が産業界に足がかりを求めてゆくには現実的にはこの道しかなかったのである。実際の形態がどういふものになるかと、高校教育が再び産業の現実の根を下ろすには、この辺から突破口

を開く以外にはなかったのである。果たせるかな農業教育にはこの方式が多くの問題を投げかけた。巡回教育方式による個別的現場学習は形骸化した農業教育の反省を促すきっかけとなった。工業教育でも高岡の中小企業の組合との結びつきを地盤として、一方には企業の中に青少年育成の雰囲気をもし出し、企業の現場に教育の指導的人物を生み出していった。また学校自体の教育が現場の要請に答える努力をしなければならぬことを通じて、教育課程の編成に一大検討の必要があることを自覚せしめるに至った。

いかなながら教育界の一般的な雰囲気は全日制教育尊重という麻薬の中毒にかかっていた、その本質的意義を理解せず、極めて冷淡であった。若し現場教師がもっと積極的にここにとびこんで努力し、一般の人々の後援があつたら、はるかに早く日本教育の改革の気運を記すことができたであろうと思われる。

それはさておき、西永君はこの方向の教育がとくに好きであった。好きというのは妙な言い方だが、本当にこのプロジェクトの意義を愛し、よく将来を見透していた。これは後日の話だが、彼が県の教育委員会に入って産業教育係長となったとき、真先に私に相談があつたのは、勤労少年教育センターをつくるという構想であった。それは単に当時の狭い意味での勤労青少年教育でなく、このことを通じて、学校教育の教育内容、方法、教材、教具の根本的な体質改善のよすがとしようというものであって、私も大賛成であった。この方向はしかし第三次の総合計画―人間能力開発計画のプロジェクトの課題となっている。

○ 理科センターは文部省が補助をして各県に設けて行ったが、富山県の場合は産業教育館の経験の上に積みあげられたもので、他の諸県とはちがった性格を発揮して異彩をはなっている。これこそ総合プロジェクトの意義を発揮したものといえよう。夢はふくらむということがあがるが、雪だるま

のように次第に大きなエネルギーとしてかたまりつつある。福光の地域センターの例のように、地域の教育センターへと発展の兆しをもつものがあらわれているのである。

理科センターは最初のサービスセンター構想の中にあつた教育現場の体質改善をバックアップする機関として着々とその機能を果たしつつある。ここを中心として小中高校のプログラムが作成されつつあることはそれを物語るが、こういう仕事を推進したのも西永君であつた。

○

過去十五年の富山県総合教育計画というプロジェクトの歩みをみると、いつも何か新しいアイデアによる具体的機関を設けて、それを中心として過去の教育体制にくさびを入れようとして来た。第一次計画の際のプリンスプルの一つとして、まずモデル的实践により十分研究しつつ、普及をはかつて行くということがスタッフの間に承認されていたが、そういう原則のあらわれがこれまでの進行であつたとも言える。このように見ると、これからがいよいよ本格的プロジェクトになると言える。これまでのモデルの实践の経験を土台として全面的な体質改善にのり出す時期が来ているとも言えるのである。

こういうようにみると大切な時期に西永君が逝ってしまったというのは全くやりきれない気がする。なんとという自然の悪戯なのだ。

ただ一つの救いは、西永君の育てた俊材が過去十五年のプロジェクトの中で、多く経験をつみ後に続こうとしていることである。誠に一粒の麦死なずばということであろうか。私は富山県の教育計画の功績は、そのこと自体の中にもあるが、このプロジェクトを通じて多くの人を育てたということにあるのだと思つている。誠に西永君はその点でよき教育者であつた。彼の行く所、産業教育館といい、産業高校といい、理科センターいづれも俊才雲の如くは少し大げさだが育つて来た。この力は大きいと思う。第三次の総合計画としての人間能力開発計画が多くの彼の後継者によつて構

想され、新しいプロジェクトが次第にその姿を明らかにしつつあるのは、その証拠である。

○

それにしても私は、この第三次の人間能力開発計画というプロジェクトで、彼に是非ともやってもらいたいことがあつた。

この総合開発のプロジェクトも第三次を迎えるに当たつて漸く本格化して来た。日本の社会が、また世界の状況がそれを要請して来ているからである。いよいよ教育の体質改善という問題に全面的にのり出す必然性が一般にも認識されたのである。それには、これまでのどちらかといえばモデル的実践ともいふべき体験を土台にして、総合的、全面的なプロジェクトの展開をしなければならぬであろう。そういうことをなすとげる中心機関として、第三次の人間能力開発計画は、総合教育センターを打ち出している。いわば総合プロジェクト推進本部である。或いは第一次の計画の際のサービスセンターの根本にもどつて、それを一段と拡充したものと考へてもよい。行政に対する科学的なバックアップ、プロジェクトの推進のための研究と企画、教育現場の習慣を切りかえるような新しい教科書、教材、教具の提供、こういった機能を果たすものが登場するときであろう。

これからのプロジェクトはいよいよ指導的な行政のわくを超えなければならぬことは必然である。こういう仕事こそ西永君に最も適していたと思つて、楽しみにしていたのだが、かえすがえすも残念なことだ。

それにしても、西永君は、本当に郷土をもち、郷土につくし、郷土に愛された人というべきであろうか。私のような故郷をもたない風来坊にはしみじみうらやましいとも思う。彼の一生こそ郷土に築く一生であつたと思う。総合教育計画、人間能力開発の総合プロジェクトが彼のその郷土に築く仕事であつた。それはもうすぐ金字塔となるのであろう。

(現日本生産性本部プログラム教育研究所長 元国立教育研究所員)